

REVIEWS

連帯の挨拶

馬淵浩二『連帯論——分かち合いの論理と倫理』へ

川村 邦光

テーマは連帯、ある者にはノスタルジーを懐かせ、忸怩たる想いを噛みしめさせよう。また、それははかない幻想だと孤高の想いに自足しつつも、いじけて潜めていた寂寞とした悔いを甦らせるかもしれない。そうであるなら、その想いを深々と沈潜させ、内省することにこしたことはない。本書はそのよき導きとなろう。失敗、あるいは敗北の真因に辿り着けるかもしれない。また再び街頭に繰り出していく気になれるかもしれない。無用・廃残の者、今日はやりの言葉で言えば、不要不急の徒に対して、感傷を捨て去り、弛緩した諦念と妄想に緊迫した予感を共存させ、困難な情況へ立ち向かう糧となるやもしれない。

どんな本でも言えるかもしれないが、本書を読もうと目次を見ただけで、その議論・立論を辿るのにはかなりの労力もしくは忍耐を要するだろうと、たじろいでしまうかもしれない。緻密なむずかしい議論が怒濤のように迫ってくると予想されるからだ（本を読み始めようとする場合、どこから読む／見るのだろうか。私は、小説は別として研究書などのようなものの場合、目次を見て、それから参考文献一覧を見てしまう。そうすると、何とはなく、全体の見通しがつき、解った気になる）。私のような

粗雑な者にはいい試練になるはずだ（最近、通しで一冊の本を読むようになった。三、四冊、同時進行で読むのだが、やっぱりきちんと通しでと読むと、達成感と言っていいか、読んだ気がするし、教えられ学ぶべきところが多く、勉強になる。著者はよくもまあ勉強しているなあと、感心してしまうことが多い）。

本書では、マルクスを踏まえて Kommunismus の原則を探り、どのような未来を想像できるかを追究した『世界はなぜマルクス化するか—資本主義と生命』（ナカニシヤ出版、2012年）を発展させ、その所論の基盤となる、人間生存の要件もしくは基本的な存在様式、すなわち連帯に焦点を合わせて論が展開される。`連帯を求めて孤立を恐れず、力及ばずして仆れることを辞さないが、力を尽さずして挫けることを拒否する、を展望することがテーマである。

序章はレベッカ・ソルニットの『災害ユートピア』から始まる（ソルニットの本は読んでいて、色んなことを気づかせられたり、思い返させられたりして、恥じらいを懐かせることが多い。この本で私は1964年6月、中学校での昼休み時間に起こった新潟地震を思い出した）。大災害による既存秩序の解体、それは相互扶助・利他主義の発揮さ

れる「アナキズム的な連帯の空間」「ユートピアの連帯空間」を垣間見させる（幸徳秋水は1906年のサンフランシスコ大震災に遭遇し「全く無政府共産制（Anarchist Communism）の状態に在る」「財産私有は全く消滅した、面白いではないか」と、無政府共産制の実現を確信した）。馬淵がソルニットから引き出すのはこれだけではない。連帯は日常生活では抑圧されるが、それでも存続しているということである。人間の生は脆く、他者の力添えがなければ生きていけない、「人間は連帯的存在である」。結論めいたものが早々と出されているが、問題はここからだ。連帯をめぐる思考を解析・再編することがテーマなのである。

「連帯とは、共通の性質・利益・目的を有する複数の者たちが、あるいは他者の利益・目的の実現に関与する複数の者たちが、協働や扶助（の責任）を引き受けることで成立する結合のことである」と、とりあえず定義される。副題にあるように、そこでは「分かち合いの論理と倫理」が培われ展開される。社会的、政治的、市民的、人間的連帯を代表的な類型としてあげられる。

社会的連帯論・政治的連帯論の系譜として、コントやデュルケーム、ブルジョワといった社会学者、マルクス、エンゲルス、カウツキー、ベルンシュタイン、ルカーチ、グラムシといった社会主義者、そしてアナキストのバクーニン、クロポトキン、それからカミュの所論があげられ、その問題点が考察される。柔軟で豊かな思想を展開していると言えそうな、アナキズムだけをあげてみる。プロレタリアートのスローガン

を連帯だとし、「みんなは一人のために、そして一人はみんなによって、みんなのために」と唱えたバクーニン、「人間的連帯性と社交性の感情もしくは本能」（『相互扶助論』）を発掘したクロポトキン、そこには Kommunismus の原則が息づき、連帯を結び合わせる贈与の論理がある。人間を生命という視点から相互扶助とネットワークに支えられた存在とし、その日常生活は相互扶助と連帯の空間だとするのが、アナキズムである。

市民的連帯として、福祉（国家）について論及する。国民年金法第一条に「国民の共同連帯」という言葉あることを初めて知った。福祉制度・社会保障、福祉国家、そこには匿名的な関係のもとで連帯が制度化されている。税金・年金保険金・介護保険金ばかり取られていたと思っていたが、これも社会的連帯だと言われると、何となく納得してしまう。現在では福祉国家や福祉制度は不評で人気がない。連帯ができてくいのが現代だということから、連帯論が求められてもいよう。

苦痛と屈辱を連帯の人間に共通する基底だとするローティ（『偶然性・アイロニー・連帯』）、その「われわれ」はリベラルな我々でしかなく、対抗する複数の我々との連帯の可能性を消失させると批判される。しかし、我々は対抗的な他者との間に境界線を引き、絶えざる対抗・抗争を生じさせる、あるいは追い求める。それは必然として甘受すべきか、解決する方途があるのか、難問である。個人を合理的エゴイストと想定するヘクター（『連帯の条件』）は、共同

財を得るために集団に参加するが、協力すべきとする負担を求められ、一定の義務を課され、サンクションと監視によるコントロールを通じて、個人が集団に貢献する関係が成立する、これがエゴイストの連帯である。これも制度化された連帯の一つだが、企業の就業規約に拘束された契約関係による業務の履行のようである。

カトリックの社会教説には四原理のひとつに連帯がある。貧しい者の側に立ったイエスに依拠するのである。カトリック・教皇たちは現代社会の動向に合わせて、後追いつきながらいいことを言っている。だが、カトリックの自己弁護・正当化のアリバイ作り、何らかの運動に転化されない、言い放しのおためごかしにすぎないとも受け止められよう。かつての解放の神学を否定したためなおさらである。抑圧・弾圧や差別、不平等に加担してきたことを自己批判せずに糊塗しているにすぎないと言われても仕方ない。だが、連帯の言説・思想・実践の水脈を保持してきたことも確かである。

こうした連帯の思想を基礎づけ実行するうえで、何よりも眼を向けなければならないのは経済である。そこで連帯経済（廣田裕之『社会的連帯経済入門』など）が着目される。私は聞いたことがなかった。2010年前後あたりから、連帯経済は現われたようだ。少額融資に特化したマイクロクレジットはよく知られている。ユイ（結）やモヤイ（催合）という互助的な経済活動からすると、「本来、経済は連帯である」。生命の再生産のような、互助的な営みを基盤とする幅広い連帯経済は、商品交換や利潤

追求を超えて、人類史的な意義と必然性を帯びた試みになるかもしれない。

第四の人間的（道徳的）連帯、人類全体からなる道徳的共同体内部での連帯という遠大な連帯、それは果たして成立するのか。馬淵の緻密な議論を私なりに辿ってきた。「人間は本来連帯的存在」、人間の存在様式・構造は連帯的だという命題を掲げる。果たしてそうか、ここで恐らく躓いてしまう人は多いだろう。世界はかなり暗澹たる状況だ。有史以来、エゴイステイックな搾取・破壊は止まることを知らない。資本主義、またそれによる温暖化は自然・地球を食い尽くし、居住・生存不能にして、廃墟を残すだろう。もう準備している国や人々もいるが、銀河・宇宙に逃亡するしかない、破滅へと向かうのが人類史だと、ややペシミステイックに思わざるをえない事態が転がっている。これから一層酷い状況が生起しそうだと予想できなくもない。馬淵はどのように論を展開するだろうか、少なからずスリリングだ。

まずは人間の身体性である。身体と外部の間に生起する物質の流れと循環という身体の物質代謝性、外部・他者に依存せざるをえない欠如存在としての身体の社会的物質代謝性。人間は身体の非自足性ゆえに外的物質ばかりではなく、社会的物質代謝を成り立たせている人々のネットワーク、それを構成している他者に依存することになる。こうしたネットワークがなければ身体は生きていけないし、再生産も不可能であり、また外的環境によって身体は損なわれるという、身体の脆弱性によって規定され

ている。この脆弱性は他者とのネットワークにおける協働・相互扶助を通じて、欠如が補われ、非力さは過剰な力に溢れてくる。このようなプロセスに「欠如と過剰の弁証法」が展開される。人間は本質的に連帯的なのではなく、人間の存在様式・構造が連帯的なのである。

解らなくはない。だが、他方で、戦争を發明して以来、連帯を基盤としつつ、あるいは連帯を内包しつつ、対抗的・競合的・抗争的だとする意見も出てこよう。連帯的・抗争的という二重性こそ、人間の存在様式ではないかと異論もあろう。二項対立的ではなく、二項が絡み合い、相克してしのぎを削り、それが進展するにともない、「欠如と過剰の弁証法」によって、その相克も大きくなり、非力さの過剰な力は暴力を強化して、抗争的な側面を肥大させ、破壊的な軌跡を辿ってきたといった論が出てくるかもしれない。連帯的・抗争的といった二重性は、神話・宗教・思想・イデオロギーに表象・結晶されて解消されることなく続いている。

ある敵味方に分かれた闘争を考えてみよう。いずれかに連帯する者／連帯しない者、関わらない傍観者、無関心な者がいる。中立を表明する者もいるかもしれない。それはどうしてか。端的には、欲望や思考、そのなかでも利害の共有の有無からだろう。人間的連帯ではないからか、あるいは「人間的、が欠けている、不十分だからなのか」と問われよう。人間の連帯的存在性とは本来的でも本源的でもなく、未決の可能性としてあるのではないか。連帯的な人間の存

在様式・構造を裏切るからこそ、分かち合いの倫理を無碍にするからこそ、人間は自分を見つめつつ、連帯・分かち合いの倫理の実践を逆説的にあるいは堂々巡りにせざるをえないとも言えるのだろうか。ともあれ、遙か昔、人間は社会的動物だと唱えられて以降、あらゆる生き物に社会性を認めざるをえないところまで辿り着いている。これは歓迎すべきことなのであろう。遙か遠い未来、人は動物と分かち合い、連帯する日が訪れるだろうか。連帯の実践、これを本書は読者に促していよう、

(かわむら くにみつ 文筆業)

馬淵浩二『連帯論——分かち合いの論理と倫理』
筑摩書房、2021年